

現象学にインスピレーションを受けたエスノメソドロジーの方向性 ——三人称の現象学をとおして見えること——

池谷のぞみ

1. はじめに

この度は、現象学・社会科学学会の皆様と、やりとりをさせていただく機会を得たので、「三人称の現象学」という分析モードをとおして、エスノメソドロジーが現象学のどのような議論を踏まえて提示され、どのような方向に向かうべきなのかを考えることにした¹。

H.ガーフィンケル (Harold Garfinkel) の没後 10 年が経とうとしている。A.ロールズ (Ann Rawls) を中心に彼の遺稿の整理が行なわれている最中であり、ガーフィンケルの思索の変遷を辿っていく作業を行なう環境を関係者が整えている段階である。環境が整った際に、探究すべきことが多くある。たとえば、1964 年にガーフィンケルが提示したエスノメソドロジー研究のプログラムはそれまでの著作から大きな転換を示すものであったが、どのようにしてその転換に至ったのかについては、公刊された彼の著作の中では自身による説明は存在せず、今後の研究が待たれる点の一つである。さらに、論文の中では多くの哲学者の概念が提示され、それをガーフィンケルなりにエスノメソドロジーの議論の中に取り込んできた後がさまざまな箇所で見られる。そうした概念の中には A.シュッツや F.カウフマン、A.ギュルヴィッチ、M.メルロ=ポンティの概念も含まれるがそれらに限られるわけではない (たとえば Garfinkel 2002)。哲学の諸概念の取り込み方について彼自身は、概念を「誤読する」という表現を用いる。各哲学者の思想における位置付けや、哲学における議論の忠実な継承と発展自体を論じるのではなく、ガーフィンケルが独特の仕方です社会学における問題の解決のために取り込むことを「誤読する」という表現で表していることがうかがわれる (Garfinkel 1977; 2002)。こうした点についても現在整理され刊行されつつあるガーフィンケルの遺稿に基づいて行なわれることになるであろう、今後の研究が期待される。

そうしたなか、アンダーソンとシャロックは著作『Action at a Distance: Studies in the Practicalities of Executive Management』の中で、「三人称の現象学」をエスノメソドロジー・会話分析という研究領域の一つの分析モードとして提示した (Anderson and Sharrock 2018)。実は、彼らは以前にも「エスノメソドロジーと現象学の関係」という論文でエスノメソドロジーを特徴づける概念として「三人称の現象学」を提示している (Anderson et al 1985)。1985 年の論文は、エスノメソドロジーを現象学的社会学として位置づける A.ギデンズなどによる紹介において、現象学的社会学の体裁を呈していないという批判に見られるようなエスノメソドロジーに対する誤解に反応する形で書かれている。ガーフィンケルの現象学への

¹ この度は、現象学・社会科学のシンポジウムにお招きいただき、準備段階から当日、そして執筆の段階で、高艸賢氏並びに家高洋氏とやりとりをさせていただいたことに感謝しております。お二人の問いかけに対して最大限、お応えしようと努力しましたが、残りは宿題とさせていただきたいと思えます。

関心が方法論的なものであることを説明し、エスノメソドロロジーは「シュッツの拡張」として位置づけられるとする。これは、後に詳しく述べる、ガーフィンケルがシュッツによる「常識的構成物 *common sense constructs*」と「科学的構成物 *scientific constructs*」の区別を引き受け、最終的には「常識的構成物」すなわち活動の参加者によって秩序がどのように構成されるのかそれ自体を記述することへと移行していったことと関わる。こうしたガーフィンケルにおけるシュッツの位置づけの仕方は、M.リンチ (1993) のそれとは異なることに留意が必要である。さらに、研究者自身の意識、経験、動機などに関する内省に関心をおくのではなく、ガーフィンケルは活動の参加者すなわちメンバーの方法に関心を持つ。そういう意味で、一人称ではなく、三人称の現象学として特徴づけることができるとする。

1985年の論文ではこのようにエスノメソドロロジー自体を現象学との関係において特徴づけるものとして「三人称の現象学」を位置づけていたのに対して、2018年では、複数の分析モードが存在するエスノメソドロロジー・会話分析における一つの分析モードとして提示している点が異なる。特に、時間と空間を超えて構成される現象に焦点をあてる際に適切な分析モードとして提示する。会議資料の書き手と読み手によって達成される組織の「共同性 *consociation*」という社会的事実を記述しようとする際に、適切な分析モードとして彼らは「三人称の現象学」を提示するが、このことがただちに、この分析モードが非同期的な場面にもみ適切で、他には適切ではないということの意味しない。それは、同期的な秩序達成場面を分析した研究が多いなか、あえてこのような対象を選択することで、特定の分析モードを選択することで実は何を行なっていることになるのかを省みる必要性を研究者に促していると言えると考えられるからである。

エスノメソドロロジー・会話分析研究（以後は短縮し「エスノメソドロロジー研究」とする）で経験的研究を展開する研究者の多くにとって、現象学は、ガーフィンケルならびに彼の周囲の研究者が大きく影響を受けたという意味で「通過点」にすぎず、その通過点を経た現在、もはや特別な関心を持つ研究者でなければあえて向き合う対象ではないかもしれない²。しかしアンダーソンとシャロックは、エスノメソドロロジーにとっての単なる通過点として現象学を振り返っているわけではない。この点が、リンチ (1993) とは異なる点である。会話分析や相互行為分析といった、エスノメソドロロジーから派生した分析モードから、特定のものを研究者が選択する以前にあえて遡り、ガーフィンケルによるパーソンズの理論の検討をあらためてたどることで、その検討から現れてくる、エスノメソドロジ的分析において考慮すべきことについて確認を行なっているといえる。そのことにより、特定の分析モードを選択することに伴って研究者が何を行なっているのかを見極め、トピックに適切な形で探究を進めることを検討する必要性を研究者にあらためて問いかけていると考えられるのである。こうした議論を踏まえて、彼らが提示する三人称の現象学とは、時間と空間を超え

² たとえば、秋谷直矩・平本毅 (2019) はエスノメソドロロジー・会話分析に関する最近の日本語の研究動向をまとめた論文のなかで、現象学色彩の後退を指摘しており、また前田泰樹 (2020) は、エスノメソドロロジーには現象学に対してさまざまな態度をとる研究者がいることに言及した上で、両者の関係について慎重に論じている。

た秩の達成に焦点をあてる上で適切な分析モードとして今回は提示されている。しかし彼らの行なった研究方針の選択とその意味を考慮すれば、会議資料を書くことと読むことという非同期的な場面のみならず、同期的な場面、すなわちやりとりが同期的になされるような場面も記述対象の範疇に入れることが、論理的には開かれていることがわかる。

そこで本稿では、アンダーソンとシャロックが「三人称の現象学」の下で提示した議論を検討することを通して、この分析モードそれ自体を明らかにすると共に、彼らの議論がどのような問題提起を行なっているものとして読むことができるのか考えていくことにする³。

2. 常識的構成物と科学的構成物

アンダーソンとシャロックが一つの分析モードとして提示する三人称の現象学は、ガーフィンケルが研究プログラムとしてのエスノメソドロジーを提示するに至るまでの経緯を、これまでに利用可能な文献に基づいて整理した帰結として位置づけることができる。エスノメソドロジーに対する現象学の影響は、リンチ(1993)の整理が知られているが、アンダーソンとシャロックはそれについて直接には言及はしないものの、明らかに異なる整理をしていることは注目すべき点である。三人称の現象学は、大きく二つの構成要素からなる。一つは、研究者が関心対象とするトピックに関わる科学的構成物の検討、もう一つはそのトピックの常識的構成物の検討である。この二つの区別は、シュッツに由来する。

シュッツによる「常識的構成物 *common sense constructs*」と「科学的構成物 *scientific constructs*」の区別は、自然科学と社会科学における研究対象の違いに関する考察に基づいてなされたものである(Schutz 1962a)。「一次的構成概念」と「二次的構成概念」と訳されることもある。理論のような枠組みを意味することもあるため、「構成物」とする。自然科学における研究対象である分子、原子、電子は、自ら自然界に対して何の「意味づけ」もしていないし、分子、原子、電子が互いに対して「意味づけ」をしているわけでもない。他方、社会学者にとっての研究対象である社会的世界の場合、対象となる人びとはその世界に対して意味づけを行っており、また互いに何らかの意味づけを行っている。つまり、社会的世界については、その世界を構成する人びとによる常識的理解がすでになされている。社会学者は、メンバーによる常識的理解を基に、科学的方法に則って理論を構築し、科学的理解を提示するという図式になっていることをシュッツは提示したのである(Schutz 1962a)。

この図式を提示することで、シュッツは社会的世界に対する志向の違いを区別した。日常世界の人びとの志向を「自然的態度」と呼び、他方、日常世界の人びとを研究する際の態度を「科学的態度」呼んだ。社会学者は、対象とする人びとが活動する世界に対する「常識的理解」に基づく「自然的態度」とは部分的に異なる「科学的態度」でその世界を理解しようとしている。研究対象となる人びとにとっては、自分たちが関わっている活動を遂行する

³ 岡田光弘(2019)は、これまでシャロックらが社会科学の方法論的な議論を進めるなかで行なってきた、ヴィトゲンシュタインの規則の解釈等をめぐる議論と関わらせる形で、三人称の現象学に言及している。

ことが当面の関心で、その関心範囲で世界を理解しようとする。それに対して社会学者は、そもそも対象とする人びとの「常識的理解」を精査し、批判的検討を加えた上で知識として提示する。そういう点で、基本的には生活世界に関する「常識的理解」は同様に想定しながらも、研究者はその場では観察やインタビューなどを通して研究目的を達成しようとしており、そういう意味では対象となる人びとは異なる活動を遂行している点で、人びとの「自然的態度」とは異なる態度で臨んでいる。これをシュッツは「科学的態度」と呼んだ。

このように、自然的態度の人びとにとって、社会的世界に関する「常識的理解」が社会学に先行する形で利用可能であるという点の指摘は、社会学のみならず社会科学全般における知識の特徴に関わることである。社会的世界について研究を行う社会学者は、人びとの「常識」を参照しつつ、理論を構築する。メンバーの「常識」が一次的構成物とすれば、社会学者の理解は二次的構成物となる。両者をシュッツはそれぞれ異なる形で組織された社会的世界に関する「知識」として特徴づけた。

ここで注意を喚起しなければならない点がある。人びとの「常識的構成物」と社会学者の提示する「科学的構成物」のいずれについても「知識」という言葉を使う理由についてである。これは、シュッツが両者を異なる形で組織された異なる様式を持つという位置づけをしていることを考慮している。もし社会科学の方のみを「知識」と呼ぶことにしたとすれば、知識という概念の日常的な使用に照らしたときに、両者の間に真偽の点から評価を与えることになってしまう。それは、シュッツの意図に反することになる。したがって、本書では両者の「理解」を「知識」と呼ぶことにするが、すでに述べた理由から、相対主義的な立場をとっているわけではないことに注意を促したい。

また、この点に関係して注目すべきことは、浜日出夫（1999）もリンチによるシュッツ解釈を批判的に論じている通り、シュッツは科学的理解と常識的理解を対立させたのではなくて、異なる方法や規則にしたがって異なる形で組織された、異なる様式の知識であるとしたことであり、態度の違いとした点である。さらにシュッツは、対象に対する志向の違いを明らかにするために科学的態度を自然的態度と対比的に提示してみせたのであり、科学者の活動それ自体を記述しようとしたものではないという点も、浜による重要な指摘である。

さらに、これまで本書で「常識」と括弧に入れて表記してきているのは、いずれも、対象となるメンバーの許で組織されているものであることによる。何を「常識」とするかは集団に依存する。したがって括弧に入れることによって、固定的な内容を示唆するのを避け、常識を物象化して捉えられることを避けることを意図している。

3. ガーフィンケルの科学的構成物から常識的構成物の検討への移行

(1) 記述に求める条件

あるトピックを扱う特定の科学的構成物としての分析枠組みについて、対象とするトピックを経験的に明らかにするという観点から見て、どの程度効果的にそれを行なえるのか

という観点から検討する。アンダーソンとシャロック (Anderson and Sharrock 2018) によると、その際の条件として、ガーフィンケルが採用していたのは次の二点となる。

1) 記述の枠組みと記述結果との依存関係

記述による説明はさまざまな枠を用いて行なうことが可能で、説明の違いは枠組みの前提によって異なる。つまり、分析結果の説明と説明に用いる枠組みは依存関係にあることから、枠組みの有効性を評価するために、分析結果の説明を使うことはできない。

2) めざすべき記述の方法論的な厳密性

ガーフィンケルはカウフマン (Kaufmann 1958) とシュッツ (Schutz 1962b) に従い、社会科学では、方法論的に厳密な記述をめざすことが求められるとした。そのために具体的には理論的な構造、並びにその理論の経験的適用の結果は明確で、論理的で、一貫性がなければならないということを意味し、究極的には自然科学の記述と比肩するようなものがめざされるとした。ここで鍵とされるのは、理論においてなされる想定について透明化することであり、さらには、明確な断りなしに想定をするべきではないということである。ここで注目すべきは、カウフマンとシュッツからガーフィンケルが引き継いだのは「記述の厳密性」であると、アンダーソンとシャロックが指摘している点である。ガーフィンケルがカウフマンとシュッツから引き継いだのは古典的な科学論であり、それが、「社会学で研究される実践的行為の領域の『外側』に理解可能な理論的立場がありえないという」立場において研究を進める際のいわば足枷として「プロトエスノメソドロジー」の源となっているとするリンチ (1993:175) の主張とは明らかに異なっている。

ここでガーフィンケルが設定した厳密性には、フッサールの影響が見られる。現象学的還元と形相的還元により、前提に基づかないで哲学の基礎を探究する中でフッサールが追及した厳密性 (Husserl 1998; Schutz 1962e) を、ガーフィンケルは社会学の記述にも求めたのである。具体的には、後に見るように、パーソンズの理論をカテゴリーに還元しながら、経験的な研究を遂行する上でどのような前提を必要とするのか、前提を極力排除することをめざしながら検討を行なっている。そしてガーフィンケルが社会学において実現しようとしたこの厳密性こそ、それをほとんど満たしてこなかった社会学に対してエスノメソドロジーが強く突きつけたものだったのであり、広く信じられているような、論理実証主義への批判ではなかったとされる (Anderson et al 1985)。アンダーソンらは、ガーフィンケルは現象学をあくまでも方法論的に参照していることに注目すべきであると指摘する (Anderson et al 1985)。こうした現象学的還元への参照の仕方は、現象学においては典型的なものではないかもしれないために、批判の対象ともなりやすい。しかしガーフィンケルはあくまでも、社会学 (エスノメソドロジー) を行なうために現象学を参照することを様々な箇所論じていることは、すでに述べた。

上記のような条件を考慮しながら、ガーフィンケルが社会学の理論に対して抱いていた問題関心は、理論がどれだけ効果的に社会構造を経験的に明らかにできるかという点であった (Anderson and Sharrock 2018: Chapter 1)。そこでこの問題の解決策を見出すために、ガ

ガーフィンケルは理論やモデルを、社会構造を観察可能に、そして分析可能にするための、インストラクションのまとめりとして扱った。ガーフィンケルがとったこの方針は、彼が「プラクシオロジカル・ルール *praxeological rule*」と呼ぶものである。つまり理論を（読者に向けた）インストラクションからなる一つの「方法」として取り扱い、その方法が目的に照らしていかに効果的な方法になっているのかを検討するものである。アンダーソンとシャロックは（Anderson and Sharrock 2018: 9）、ガーフィンケルが採用したプラクシオロジカル・ルールを示す部分として、次のような引用を示す。

見られているが特には注意を向けられていない、日常的な活動の背景は全て、社会学者が理論的な諸問題を解決することを可能にするために、生活を営む人びと、自分の子どもたちがいる人びと、思索をする人びと、関係を結ぶ人びとの観点から明らかにされ、記述される。（Garfinkel 1967: 37）

この引用は、人びとの活動の中に分析者の問題の解を見出すという方向性をガーフィンケルが提示していることを示唆する。他方、ガーフィンケルはプラクシオロジを「あらゆる分野の活動における、成功した方法から類似性を見出すことからなるということが最近記述された」（Garfinkel 1956: 190-2）と、H.ヒズ（Henry Hiz 1954）の文献に言及しながら紹介している。ガーフィンケルは、E.ゴフマンのさまざまな場面における失敗の検討などを見ても、社会学的態度においてプラクシオロジ的な方針があるとする。そうした方針に名前をつけたのが「プラクシオロジカル・ルール」である⁴。プラクシオロジカル・ルールは分析者がとる手続きで、分析者は、経験的に観察可能な現象を、自らが持ち込む問題の解決策を提示している、もしくは含んでいるものとして扱う。その際に分析者がしなければならないことは、いかにしてその観察可能な現象が問題の解決策を提示するものなのかを説得力をもって論じることである。この方針は、社会学者が社会学的態度において日常的にとる方針として観察されるものをガーフィンケルが「プラクシオロジ」と呼んで提示したものである（Garfinkel 1956: 190-2; 1967: 37）。この方針に従って彼は理論を検討対象とした。

プラクシオロジカル・ルールに加え、二番目の方針としてガーフィンケルがとったのが「概念操作 *conceptual play*」というものである。「理論中の一行為者」をシュッツは「小人 *homunculus*」、すなわち「理論的に定義された環境で動く理論的に構成された操り人形」と呼んだ（Schutz 1963: 340）。この「理論中の一行為者」と、それが活動する環境とを構築する際に研究者によってとられる方針が、「概念操作」とガーフィンケルが呼ぶものである。

概念操作（*conceptual play*）で意味することは、研究者が問題となる状況の特徴に想像性に富んだ形で変更を加えることにより、問題に対する解決を実行することであり、そしてこの変更の帰結を、研究者自身の学問領域の基本的な規則への敬意

⁴ 日本語の文献では、村田稔雄（1973）が、プラクシオロジの背景を含めて理解する際の手助けとなる。

を停止することなく最後まで辿ることである。(Garfinkel 1956: 188)

ガーフィンケルは、後に示すように、この概念操作の方針にしたがい、理論における行為者と環境を特定していくことで、選んだ理論を用いて経験的研究を行なった時に、どれだけ効果的に社会構造を明らかにできるのかを検討したのである。

ガーフィンケルは具体的な検討対象として、社会的行為の理論を選んだ。社会学において社会秩序は、「共有された状況定義が体系的に再産出される」ことによって、行為自体の相互の理解可能性 (intelligibility) が成立することにかかっている。それぞれの行為者が、他の行為者が行なっていることと、そこでめざされていることとの間の適合具合を見られることが、行為自体の相互の理解可能性が成立する条件となる⁵。すなわち、社会的行為の理論は、行為が生じる現象野における、フッサールが「ノエシスとノエマ」と呼んだものの役割を記述しなければならない。思惟作用 (ノエシス) と思惟対象 (ノエマ) を通じて、行為者は現れていること (appearance) がもつさまざまな可能性がもたらす問題を解決し、それにより、その場面における対象物並びに行為の意味が決まる。つまり、その場面が理解可能になる。このように社会的行為の理論を位置づけた上で、ガーフィンケルは当時最も洗練された理論を提示していたパーソンズの理論を対象とすることにした。

(2) パーソンズの行為理論の検討

ガーフィンケルはパーソンズの理論を「共有された状況定義の、体系的な再産出の具体例を産出するインストラクションのまとめり」(Anderson & Sharrock 2018: 10) ととらえた。パーソンズ概念体系には、社会生活の基本的な構成要素として、行為単位 (action unit) というものがある。

- a 行為者
- b 諸条件に基づく環境下の状況
- c 達成されるべき目標もしくは目的
- d 手段を評価する基準
- e 行為単位における諸要素への指向性の様式

行為単位において、指向性の様式は、状況を定義する際の根拠と、望ましい目的を達成するための手段を提示する。手段が目的と適合し、さらに効果に関して科学的な基準を満たす場合には、その手段が用いられる行為は合理的ということになる。この行為が、遭遇する他者と共に行なわれる場合に、問題は生じる。なぜなら、その他者は、自身の指向性の様式に従って状況を定義して行為を行なうことになるからである。それぞれが合理的な行為者であ

⁵ アンダーソンとシャロックは、このような形で社会的行為の理論を分析する背景として、シュッツによる、現象学の観点からのウェーバー解釈があることを指摘する (Anderson & Sharrock 2018: 9)。

るとしても、互いに異なる状況定義に基づいて行為を行なう可能性は残される。この問題は、「ダブルコンティンジェンシー」と呼ばれている。

行為者からなる集団が、継続的に関わり合いながら、社会システムを成り立たせるには、諸活動の間で調整される必要があり、したがってダブルコンティンジェンシーの問題は重要である。これを解決するためにパーソンズは、行為者が共通の文化に社会化されるという想定を導入した。社会化の過程において、規範、感情、定義など、文化を構成する要素が共有されることが確実になされる。そして社会システムの機能が働くことで、単位行為というものが可能になる。この解決策の導入にあたって考慮されたことは、第一に解決策は、体系的に、しかも1回限りではなく再産出されるべきであること、そして第二に、その再産出性は、理論の構造的配置から導かれるべきであるという点である (Anderson & Sharrock 2018: 10)。さらに、行為者が行為の調整を互いに強要するような形では、ホブズの「互いに敵対する状態」になって秩序が保たれないことになる。そこで「動機づけられたコンプライアンス」の下で行為者が調整できるようするということが求められ、パーソンズは共通の文化に社会化されるという想定を導入するに至ったのである。

パーソンズの解決策の下では、共通文化を前提とすることによって状況定義が合意され、それに照らして行為の調整が行なわれることになる。しかし、ガーフィンケルは、この状況定義の合意がどのようにもたらされるのだろうかと考えた。定義が何通りもありうるなかで、行為者双方で、「この」状況定義で行くことがどのように決められるのか。ガーフィンケルはこのことを見えるようにするために、手段・目的の合理性という前提と、文化の共有によって可能となる相互理解という想定を選び、これを取り除くことで状況定義の合意は作られないのか、もしくはどのように作られるのかを検討することにした。

その際に用いられたのが「違背実験」とガーフィンケルが呼んだ一連の研究である。違背実験では、先の目的・手段の合理性という前提と、相互理解という想定を被験者ができない実験状況を作り、その状況において被験者が他者(実験者)との間で状況定義をめぐってどのように対処するのかを観察した。最初の実験は「相談場面」で、何も知らされていない被験者の質問に対して、実験者がランダムな回答を提示し続けるという「違背行為」を行なった。しかしながら、やりとりが行き詰まらないという結果となった (Garfinkel 1967: Chapter 3)。状況としては、行為者双方にとって「意味のない senseless」やりとりであったにもかかわらず、被験者は実験者の回答を「意味あるもの」として受け取ろうとしたのである。こうして、パーソンズの理論の下ではやりとりが行き詰まるはずの状況下において、何らかの形で行為が続いたことが、ガーフィンケルにとって大きな意味を持つことになった。文化の共有という前提自体がガーフィンケル自身の立てた問い、すなわちいかにして状況定義の合意はなされるのかという問いに対する答えを覆い隠していることがわかったのである。

その後に行なった違背実験で彼は、状況定義に関わる手段や規則を明らかにしようとした。親しい者同志の会話の中で、被験者にあたる一方が発話する度に、実験者にあたるもう一方がその発話において意味することを詳細に説明するように求めることを執拗に繰り返

すという実験がある。被験者の「今朝パンクしてしまった」に対して、実験者が「パンクしたってどういうこと、とはどういうこと？」と説明を求めても、「君、どうかしてしまったのか？」などと被験者の友人は逆に質問してくる。被験者が目の前で起きていることをその場に合う形で解釈をしたり、状況の定義を変更したりすることで、やりとりは続いたのである (Garfinkel 1967: Chap.1)。もう一つの実験では、単純なゲームを行ない、実験者がわざとそのゲームの基本規則に従わないふるまいをすることで、ゲームを中断させようとしたが、中断はしなかった。いずれにおいても、実験者による、状況定義を成り立たせないようにするふるまいに対して、被験者は何が起きているのかについての状況定義並びに実験者の役割についての解釈、何がおきているのかについての解釈を少しずつ変えていき、時には起きていることを無視したりすることで、やりとり自体は続いたのである (Garfinkel 1963)。

こうした違背実験を経て、ガーフィンケルがたどり着いた結論が、文化の共有を想定するのではなく、まさにそれを想定することで見えなくなっていた現象を明らかにすることをめざすという新たな、ラディカルな研究の方向性であった。アンダーソンとシャロックは以下のようにガーフィンケルの結論をまとめる。

理解や意味、規則は、定義上共有されているものであるということを受け入れる代わりに、社会的行為者が現在起きていると捉えていることや、特定の状況について理解していることをいかに互いに示しあい、いかに相互理解が成立するのかを探究する必要がある。(Anderson and Sharrock 2018: 12)

文化の共有という想定を取り払うことによって初めて、いかにして、互いの行為の理解可能性に基づく相互理解が可能になるのかを探究することが可能になるのである。そして、互いの行為の理解可能性を、ガーフィンケルは「説明可能性 ^{アカウンタビリティ} accountability」と呼んだ。この説明可能性は、行為において成立するものである。この点で説明可能性は、社会学者が理論構築の一環で共有の文化を想定することに先行するものである。

(3) 常識的構成物の検討

人びとによって達成される説明可能性は、人びとが大抵は当然のこととして扱うことであり、そういう意味で「見られているが注意は向けられない *seen but unnoticed*」とガーフィンケルは指摘した (Garfinkel 1967: 37)。この、生活世界において成立している相互主観的な現象こそ、シュッツが常識的構成物と呼んだものであり、関心を向けた対象であった。シュッツは、相互主観性という現象が文化科学や社会科学の対象であることを指摘した上で、さらに人びとによって達成されたものとする。

われわれの日常的世界は、はじめから一つの相互主観的な文化の世界である。この世界が相互主観的であるのは、われわれが共通の影響と労働を通して他の人びと

と結びつき、彼らを理解し、彼らの理解の対象でありつつ、彼らと一緒にいる人間としてその世界のなかで生きているからである。そしてこの世界が文化の世界であるのは、初めから生活世界がわれわれにとってひとつの意義の宇宙、つまりわれわれが解釈しなければならない意味の枠組み（意味連関 Sinnzusammenhang）であり、しかもわれわれがこの生活世界におけるわれわれの行為を通してのみ構築する意味の諸関係の宇宙だからである。（Schutz 1962b=1983: 215）

シュッツは、人びとが意味を構築することを通じて相互主観性が達成されているとした。特に達成が行なわれる際の意味の枠組みに関心を持っていることがこの引用からもわかる。言い換えれば、シュッツは社会秩序の条件に焦点をあてていた。それに対して、ガーフィンケルが関心を持つに至ったのは、相互主観性を人びとがいかに達成するのかという点である。このことから、エスノメソドロジーを「シュッツの拡張」として特徴づけることが可能になる（Anderson et al 1985）。

行為の相互理解可能性の成立は、行為者が互いの行為を観察し、その場面における対象物並びに行為の意味が決まることで成立する。言い換えれば、行為者にとって現れていることがすべてであり、その観察とそれを踏まえた行為によって説明可能性を備える行為は継続する。この説明可能性がどのように成立するのかについて、活動の参加者の一人称的経験において見えるものを、三人称的に記述することをアンダーソンとシャロックは三人称の現象学と呼ぶのである。

日常生活の流れにおいて行為者たちが共にいかにして社会的行為に関わるノエシスとノエマを解決し、それによって相互の理解可能性（mutual intelligibility）と行為が持続する構造を調整するのかについての分析的記述のことを、私たちは「三人称の現象学」と呼ぶ。それは、社会的行為の秩序性というものが内側からどのように見えるのか — 「内部の編成 internal configuration」に関する観察者による説明をめざすものである。（Anderson and Sharrock 2018: 13）

「三人称」という表現において示されていることは、一人称の「私」の認識そのものを内省する方法とは異なるという点である。しかし、「三人称による記述」とは言っても、理論的枠組みを用いた視点からの提示とは異なる（Ikeya 2020）。「行為者が互いに提示し観察しているところの行為の理解可能性」がどのように一人称的な経験において達成されることで三人称においてそのように見えているのかを記述することをめざすのである。

さらにアンダーソンとシャロックは「行為者が互いに提示し観察しているところの行為の説明可能性」を記述することを、社会秩序の「内側から記述すること」として特徴づける。このようにして彼らは、観察対象者の経験の理解をいかに扱うべきかという社会学のみならず社会科学における長年の問題を、主観と客観という議論を回避する形で克服するとい

う側面からエスノメソドロジーを特徴づける。

これまで論じてきたように、ガーフィンケルが発見した、社会秩序を達成する際の「人びとの方法」 — 「行為者が互いに提示し観察しているところの行為の説明可能性^{アカウンタビリティ}」の達成の方法をエスノメソドロジーの関心としてとらえ直すときに次に問題となるのは、この関心を経験的な研究プログラムとしていかに実現するかということになる。

4. 三人称の現象学の実現

(1) 行為の説明可能性^{アカウンタビリティ}

アンダーソンとシャロックは、エスノメソドロジーの分析に関わる基本方針を、先に提示したプラクシオロジカル・ルールと概念操作に加えて以下のように挙げる。いずれも、焦点となる説明可能性^{アカウンタビリティ}をどういう性質のものとして研究対象とするかを述べたものである。

- 1) 行為の説明可能性^{アカウンタビリティ}を共に産出することは、いずれの社会的活動においても普遍的な特徴である。
- 2) 行為の合理的な説明可能性^{アカウンタビリティ}を見て理解することは、それが産出される状況に依存する。説明可能性^{アカウンタビリティ}はその場面のために産出され、したがってその場面と相互反映的な関係にある。
- 3) 場面は自己組織的である。すなわち、定義、意味、規範はその場面における行為への参加者によって明らかにされ、行為が進行するにしたがってその場面において、そしてその場面のために構成される。
- 4) 場面の説明可能性^{アカウンタビリティ}に含まれる知識、理解、解釈、意味は、形式的に特定化できるものではない。つまり、状況から抽出して列挙できるようなものではない。場面に対して文脈依存的(indexical)である。参加者が用いる方法の中には、この文脈依存性を解決するものがある。(Anderson and Sharrock 2018: 13)

このように、記述対象となる説明可能性^{アカウンタビリティ}をどのように扱うべきかをアンダーソンとシャロックは整理する。これらの点は、何か新たなものを彼らが提示したものというよりは、ガーフィンケルをはじめとした研究者たちが、エスノメソドロジーの実現に向けた初期の研究を通じて論じてきたことをあらためて整理して列挙したものとして捉えることができる。それは、議論の補強として、ガーフィンケルの、サックスやE.シェグロフ(Emanuel Schegloff)との共著の文献などをアンダーソンとシャロックが引用しているところからも見てとれる。

説明可能性^{アカウンタビリティ}と密接に関わる概念として、「メンバー」と「コンピテンス」があるが、それらの説明をする際に、エスノメソドロジーを共に展開しようとしていたサックスによる文献も引用されている。

1) メンバー

相手の行為を理解できるということは、^{アカウンタビリティ}説明可能性をそこに見出していることである。相手が詳しく言葉で説明しなくても、相手の行為を理解できるということが、メンバーとしてのコンピテンスを備えていることを意味するのである。どのようなコンピテンスが関わってくるかは、場面に依存する。専門性の高い場面に、「素人」として居合わせている場合には、自然言語に関するコンピテンスを備えていることによって相手の行為を理解できる部分もあるかもしれないが、専門性の高い内容についてなされている行為については理解できない部分も多くなるであろう。そうした場合、その専門性の高い行為に関わる部分についてはメンバーとしてのコンピテンスを備えていないということになる。つまり、その場面のメンバーである参加者によって想定される知識の社会的配分を前提とできるかどうかということが、その場面における活動を説明可能なものとして理解できるかどうかに関わるということになる。

さらにアンダーソンとシャロックは、^{アカウンタビリティ}説明可能性は行為者が互いに観察することによって達成されるという点について、サックスの論文を引用しながらさらに説明を加える (Anderson and Sharrock 2018: 13)。つまり、エスノメソドロジーにおいて「観察」という言葉は、純粋に物理的に見えるものだけに限定されないという説明を加えている。

私が以上で提案してきたことを次のように言い換えることもできる。メンバーにとって、活動は観察可能であるということである。彼らは活動を見る〔わかる〕。人びとが親密であることを、人びとが横になっていることなどをメンバーは見る〔わかる〕。メンバーは、たとえば「私の母」を見ることはなく、「実際に見ている」のは光、闇、影、遠くの物体などであると正しくないことが言われてきた。このことが、私たち〔エスノメソドロジー研究者〕が、次のような意味において行動科学的になることをもたらしたのである。つまり、人びとがどのように諸行為をまとまりとして産出し、そしてそれが諸行為のまとまりであるということをもどのように見る〔わかる〕のかを明らかにするということである。(Sacks 1995: 119 [] 内は著者による)

エスノメソドロジー研究において、メンバーが場面において観察して理解するのは「^{アカウンタビリティ}説明可能性」であり、研究者もまたメンバーが互いの行為を観察しながらいかにして「^{アカウンタビリティ}説明可能性」を見出し、また互いが「^{アカウンタビリティ}説明可能性」を見出せるように行為をするのかを観察し、記述することをめざすのである。こうして、メンバーが場面において想定する知識の社会的配分を前提としながらそこに見出すさまざまなことが観察対象となるということになり、物理的なものや言語表現に限られず、概念的なものも含まれるという指摘をサックスはしている。こうした指摘をしながらサックスは、半ば逆説的に、エスノメソドロジーがこのような形で行動科学的にならざるをえなかったという主張からは、読者は多くのことを

注意深く理解することを迫られる。アンダーソンとシャロックは、詳らかに述べてはいないが、この点にあらためて注意を向けることによって、エスノメソドロジー研究が自らを狭い分析的空間に追い込んでいないのではないかということを示唆していると言することができる。この点を検討する上で参考になるのが、シュッツによる、事物の知覚についての議論である。

私が知覚しているのは、事物のたったひとつの相だけである。他の諸相が現れてくるのは、私がその事物の周りを回ったときだけではない。さらに、私の知覚する作用によって把えられた事物のその相が、他の可能な諸相を示唆するのである。たとえば、家の前面はその裏面を示唆し、外面はその内面を、屋根はその見えない土台を示唆するなど。これらの契機はすべてひとまとめに、知覚された対象の「内的地平」と呼んでよいだろう。(Schutz 1962c=1983: 186)

いまここにおいて、直接知覚されているものは、事物の一側面であったとしても、往々にして、そこから他の相も同時に現れてくるということがあり、これをシュッツは指摘している。ある場面の「説明可能性^{アカウンタビリティ}」もまた、その場面に言語表現や物理的対象物で直接見えている一つの相に限定されないとこで成立している可能性に気づかせてくれる。その場面に固有に適切なコンピテンスがあるとみなされるメンバーが、どのようにその場面を「説明可能性^{アカウンタビリティ}」なものとしているのかは、その場面におけるコンピテンスとの関係で注意深く検討する必要があることをサククスとシュッツの引用は示唆しているからである。つまり、分析者にとって「見える」ことを過信すると、その場面の参加者が依拠している方法ならびにそれによって「見えている」ことを記述し損なう可能性があるということになる。言い換えれば、それによって「方法に固有な適切性の要件 unique adequacy requirement」を満たせない可能性もあるということが示唆されているということになる。

2) コンピテンス

「メンバー」の概念と密接な関係にあるのが、「コンピテンス」である。人びとがある一連の行為を意味のある「一連の行為」として理解できることには、その行為がなされる場面に関するメンバーとしてのコンピテンスが関わっている。「コンピテンス」はその場面に依存するものであり、行為がなされる前に、コンピテンスの内容を特定することはできない。

さらに、これまでの議論、特にメンバーに関する議論から推測されることは、あらゆる文化的コンピテンスを範囲としては想定しておいた方がいいというものである。従来、「コンピテンス」の概念は、自然言語や会話に関することを中心にとらえられる傾向にあったと言える (Garfinkel and Sacks 1970: 344)。アンダーソンとシャロックは、たとえば組織の経営幹部のコンピテンスも、科学者のコンピテンスも同様にエスノメソドロジーの研究の範疇であると指摘する。エスノメソドロジー研究の範疇を文化的コンピテンス一般に明示的に広げることは、シュッツの「常識的理解」の概念や、ヴィトゲンシュタインの言語ゲームや

生活様式のような概念との関係性を見出しやすくなることにもなる。

メンバーの方法を記述するには、分析者がそれを理解できるのに十分な、その方法に関わるコンピテンスを備えていることが求められるとアンダーソンとシャロックは指摘する(2018: 167-168)。実際に、『*Action at a Distance*』の分析対象は、高等教育機関における上級経営幹部であるが、著者のひとりの経験を踏まえたものである。ガーフィンケルは、分析者が対象となる活動における方法に関わるコンピテンスを対象者と同等に備えていることを理想とし、それを「方法に固有な適切性の要件」と呼んだ(Garfinkel 1986)。そしてワークのハイブリッド研究の議論では、記述は現象の記述であると同時に、その現象を成り立たせる活動を行なうためのインストラクションとしても読めることがめざされる(Garfinkel 2002; Ikeya 2020; 池谷 2019)。

これまでの議論を踏まえると、コンピテンスについて、アンダーソンとシャロックの議論で注目すべきなのは、以下の点であると思われる。コンピテンスの概念をガーフィンケルとサックスの当初の用法から拡張し、自然言語や会話に関するもの以外にも広げたことにある。これによって、適切な記述を行なうためにはその活動における方法に関わる適切なコンピテンスを分析者が備えていることは重要になる。その場面が専門性の高いものであるほど、その重要性は高まると言える。ワークのハイブリッド研究の議論においてガーフィンケルは、ワークを行なうのに必要なコンピテンス全体を暗黙に記述対象としていたと見られるが、それとエスノメソドロジー初期のコンピテンス概念との関係については明確に整理されないままになっていたことは確かである。

(2) 達成としての「常識的構成物」の説明可能性^{アカウンタビリティ}

これまで見てきたようにアンダーソンとシャロックは、観察可能な説明可能性^{アカウンタビリティ}の達成について、言語表現や物理的な動きに限定する必要がないことをあらためて確認している。さらに彼らは、記述対象とするコンピテンス概念について、初期に自然言語や会話を進めるコンピテンスを中心に論じられてきたままになっていたものを、あらゆる実践を行なうのに必要なコンピテンスに広げる必要があることを確認した。彼らによるこうした整理は、時間と空間を超えた現象である、組織の「共同性」の達成^{アカウンタビリティ}、その説明可能性の達成を記述対象とする準備として位置づけられる。組織の共同性は、組織において、各人が組織のメンバーとして具体的な活動をする際に、その場面を理解する上で前提として現れてくるものであり、またそれに依拠しながら活動するものである。

この共同性は、対面的な、時間と空間を同じくする「共在」を伴って経験される場合もあるが、常にそういうわけではない。たとえば、組織の上級幹部による意思決定は、対面で伝えられるとは限らず、会議の文書や上司、仕事の具体的な手順を通じて組織のメンバーに伝わることの方がむしろ多い。上級幹部による意思決定を、彼(女)らは組織のメンバーとして受け止め、それに沿う形で実践をすることを求めているものとして理解することを通じて組織の共同性は達成される。アンダーソンとシャロックは、上級幹部による意思決定がな

される会議で用いる資料を書くこと、すなわち経営状況分析などを書くこと、そして経営状況分析を読むことを通じて達成される組織における共同性の達成を記述する。読むことと書くことにおいて達成されることを分析し、会議場面における資料の使用の相互行為的な点は対象としていない。

この分析の際に、リソースとして用いられているのが、著者のうち一人が分析対象である経営幹部の一員だったときの経験である。つまり、この研究は、部外者によるフィールドワークに基づくエスノグラフィではない。著者の一人称の経験を三人称で記述しようとする例として位置づけられる。とは言え、組織におけるフィールドワークに基づいた彼らの研究、たとえば『Working for Profit』(Anderson et al 1989)を三人称現象学の事例としてあげていることから考えると、三人称現象学を研究者の一人称の経験をリソースとするものに限定していないことが確認される。

(3) 「社会的事実」という達成の再産出性と時空超越性

ガーフィンケルは「社会的事実の客観的現実社会学の根本的な現象である」という E. デュルケームの言明をエスノメソドロジーのプログラムに変換し、「不滅で日常的な社会の、社会的諸事実の産出という、そのまま理解可能なワークを特定化することがエスノメソドロジー研究のプログラムのタスクである」とした (Garfinkel 2002: 66)。「社会的事実」としてガーフィンケルがあげている例は、交通渋滞、一緒に歩くこと、一定の形式に従った行列にみられるサービスの秩序、会話の順番取りなどである。いずれも、能力を備えたメンバーがそれらの現象をそういうものとして理解し、またそのなかに加わることができる、という意味において、特定の状況を超えて構成される現象である。とすれば、社会的事実の産出においては、時空を超えた超越性の達成を記述することが含まれることになるはずである。それはどのようにして可能なのか、ガーフィンケルは明示的な解を提示してはいない。

それに対してアンダーソンとシャロックは、組織における「共同性」が例えば会議のために作成され、それが読み込まれる際にどのように達成されるのかに焦点をあてることにした。ここには二つの方針が関わっている。一つは、ある現象が「社会的事実」と看做されることにおける、その現象の時間と空間の超越性の達成をもメンバーの問題として記述しようとする方針である。組織の共同性は、メンバーが活動する上で依拠できなければ困難が生じる。そういう点で社会的事実であり、そしてそれを達成することも活動において欠かせないであろう。アンダーソンとシャロックは、敢えて従来ほとんど対象とならなかった、非同期的に秩序が達成される場面を選択し、それがいかになされるのかについて記述する方針をとった。これが二つ目の方針である。会議資料を読む幹部の一人称的経験における現象の「内部の編成」を三人称的に記述することをめざす。この分析モードを彼らは「三人称の現象学」と呼ぶ。このモードは、活動の参加者によって社会的事実として創出される秩序アカウンタビリティの説明可能性を記述するという、ガーフィンケルが提示したプログラムの一つの展開の仕方と位置づけることができる。

5. おわりに

アンダーソンとシャロックは、三人称の現象学を「第一社会学」⁶として位置づけている。これは、エスノメソドロジーの問題関心並びにその成果を、第二構成物ではなく、第一構成物としての常識的構成物の解明にあるという位置づけによっている。これは、エスノメソドロジー研究の他の社会学との関係を考える上で示唆を与えるものである。広く社会科学という文脈でも、おそらく同様の示唆があろう。したがってこれまでの議論を振り返ることにもなるので、「第一社会学」についての彼らの議論を最後に考えてみることにする。

ガーフィンケルは、科学的構成物である理論を、どれだけその理論が社会構造を経験的に効果的に明らかにするのかを検討することから始めた。パーソンズの行為理論を対象とし、プラクシオロジカル・ルールと概念操作の方針に沿って理論における想定を取り除いて何が起こるのか、違背実験と呼ばれる研究を行なった。そうしたところ、互いの状況定義を見てすり合わせることで社会秩序を達成する際の人びとの方法が、研究者による、共通の文化という前提によって見えなくなっていることを発見した。この、人びとの方法こそが、シュッツが「常識的構成物」と呼んだものに相当する。シュッツ自身はこれを記述するに至ることがなかったことはすでに見た。

「常識的構成物」は、「理論的構成物」に先行しているという関係にあるというシュッツの指摘した点にガーフィンケルは注目した。両者は決して対立的な関係にあるわけではないのである。この点を踏まえるからこそ、ガーフィンケル自身はエスノメソドロジーと理論構築をめざす伝統的社会学との関係を二つの協約不可能な「可能性 *alternate*」として位置付ける (Garfinkel 2002)。エスノメソドロジーは伝統的社会学にとって代わるものではなく、両者は異なる関心を持つ探究であるという意味でのみ共存しうる。この点は、シュッツによる「現象学はそれ自体の権利において自らの研究領域をもっており、そして現象学は他の諸学が始まるところで終わることを望んでいるのである」(Schutz 1962=1983: 194-5) という主張と重なる。

アンダーソンとシャロックは、自分たちの提示した分析モードを三人称の現象学とし、そしてそれをさらに第一社会学と位置づけることで、理論化をめざす探究との関係をさらに明確に示したということができる。同時に、会話分析も含むエスノメソドロジー研究の領域が何を共通原則として共有していくべきかその問いかけを行なっている。

1985年の彼らの論文ではエスノメソドロジーを三人称現象学と位置づけていたのに対して、2018年の著書で一つの分析モードとして位置づけし直したところには、さまざまな分析モードが存在する現状を踏まえ、そのうちの一つを選ぶことで何を行なっていることになるのか、研究者自身が見極め、慎重に議論を進める下地を提示したと理解することができ

⁶ この「第一社会学」は、デカルトの「第一哲学」を参照したものであることを著者のアンダーソンからの私信で確認している。

る。会話分析や相互行為分析といった、エスノメソドロジーから派生した複数の分析モードが提示される以前に遡り、ガーフィンケルによるパーソンズの理論の検討に遡ることで、特定の分析モードを選択することによって何を行なっていることになるのかを見極める必要性に気づくように促しているように思われる。

彼らは、従来エスノメソドロジーでほとんど分析の対象となっていなかった、時間と空間を超えた共同性の達成を、読むことや書くことなどの行為において見ることを試みた。こうした点に分析の焦点をあてるために三人称の現象学という分析モードを選択することで彼らが示そうとしたことは、エスノメソドロジー研究が、さまざまな現象を対象にし得るということだけではない。あらゆる分析に万能な分析モードというものはないこと、そして特定の分析モードを選ぶことは、分析のトピックとの関係で決めることであるはずであろうと彼らは問いかけているのである。それにどう応えていくのかが問われている。

文献

- Anderson, Robert John; Hughes, John. A.; Sharrock, Wes W., 1985, "The Relationship between Ethnomethodology and Phenomenology," in *Journal of the British Society for Phenomenology*, 16 (3): 221–35.
- Anderson, Robert John; Hughes, John and Sharrock, Wes W., 1989, *Working for Profit: The Social Organisation of Calculation in an Entrepreneurial Firm*, Avebury.
- Anderson, Robert John, and Sharrock, Wes W., 2018, *Action at a Distance: Studies in the Practicalities of Executive Management*, Routledge.
- 秋谷直矩・平本毅、2019、「分野別研究動向 (エスノメソドロジー)」『社会学評論』70(1):43–57.
- Garfinkel, Harold, 1956, "Some Sociological Concepts and Methods for Psychiatrists," in *Psychiatric Research Reports* 30 (6): 181–95.
- Garfinkel, Harold, 1963, "A Conception of, and Experiments with, 'Trust' as a Condition for Stable Concerted Actions." In O.J. Harvey (ed.) *Motivation and Social Interaction*, Ronald Press, 187–238.
- Garfinkel, Harold, 1967, *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall.
- Garfinkel, Harold, and Harvey Sacks, 1970, "On Formal Structures of Practical Action." In John C McKinney and Edward A Tiryakian (eds.), *Theoretical Sociology: Perspectives and Developments*, Appleton-Century-Crofts, 338–266.
- Garfinkel, Harold, James Heap, G Hinkle, John O'Neill, George Psathas, Edward Rose, Edward Tiryakian, H Wagner, and D L Wieder, 1977, "When Is Phenomenology Sociological," in *Annals of Phenomenological Sociology*, 2: 1–40.
- Garfinkel, Harold, 1986, *Ethnomethodological Studies of Work*, Routledge.
- Garfinkel, Harold, 2002, Anne W Rawls (ed.), *Ethnomethodology's Program: Working Out Durkheim's Aphorism*, Rowman & Littlefield.
- 浜日出夫、1999、「シュッツ科学論とエスノメソドロジー」『文化と社会』マルジュ社、1: 132–53.

- Hiz, Henry, 1954, “Kotarbinski’s Praxeology,” in *Philosophy and Phenomenological Research*, 15(2): 238–43.
- Husserl, Edmund, 1998, *The Paris Lectures*, Springer.
- Ikeya, Nozomi, 2020, “Hybridity of Hybrid Studies of Work: Examination of Informing Practitioners in Practice,” in *Ethnographic Studies*, 17:22–40. <https://doi.org/http://dx.doi.org/10.5281/zenodo.4050533>.
- 池谷のぞみ、2019、「社会課題とエスノメソドロジー研究との関わり：救急医療におけるワークの研究を中心に」『年報社会学論集』32:12–32.
- Kaufmann, Felix, 1958, *Methodology of the Social Sciences*, Humanities Press.
- Lynch, Michael, 1993, *Scientific Practice and Ordinary Action*. Cambridge University Press. (水川善文・中村和生 監訳、2012、『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』勁草書房).
- 前田泰樹、2020、「現象学とエスノメソドロジー：経験の一人称性と社会性」『フッサール研究』17:87-106.
- 村田稔雄、1973、「ミーゼス研究：ミーゼスの人間行為学方法論-2-」『横浜商大論集』7(1):1–21.
- 岡田光弘、2019、「『社会学1・0』『社会学2・0』vs.『社会学0・0』『社会学1・5』：ウィンチェンシュタイン派の『観察社会学』という視点から」『新社会学研究』(4): 69-81.
- Sacks, Harvey, 1992, “Lecture 14: The inference-making Machine.” In Gail Jefferson (ed.), *Lectures on Conversation. I*, Blackwell Publishers, 113–125.
- Schutz, Alfred, 1962a, “Common-sense and Scientific Interpretation of Human Action.” In Maurice Natason (ed.), *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff, 3-47. (渡部光・那須壽・西原和久訳、1983、「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」『アルフレッド・シュッツ著作集第1巻 社会的現実の問題 [I]』マルジュ社、49–108).
- Schutz, Alfred, 1962b, “Concept and Theory Formation in the Social Sciences.” In Maurice Natason (ed.), *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff, 48- 66. (渡部光・那須壽・西原和久訳、1983、「社会科学における概念構成と理論構成」『アルフレッド・シュッツ著作集第1巻 社会的現実の問題 [I]』マルジュ社、109–133).
- Schutz, Alfred, 1962c, “Some Leading Concepts of Phenomenology.” In Maurice Natason (ed.), *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff, 99- 117. (渡部光・那須壽・西原和久訳、1983、「現象学のいくつかの主要概念」『アルフレッド・シュッツ著作集第1巻 社会的現実の問題 [I]』マルジュ社、175–198).
- Schutz, Alfred, 1962d, “Phenomenology and Social Sciences.” In Maurice Natason (ed.), *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff, 118- 139. (渡部光・那須壽・西原和久訳、1983、「現象学と社会科学」『アルフレッド・シュッツ著作集第1巻 社会的現実の問題 [I]』マルジュ社、199–224).
- Schutz, Alfred, 1962e, “Husserl’s Importance for the Social Sciences.” In Maurice Natason (ed.), *Collected Papers I: The Problem of Social Reality*, Martinus Nijhoff, 140- 149. (渡部光・那須壽・西原和久訳、1983、「社会科学に対するフッサールの重要性」『アルフレッド・シュッツ著作集第1巻 社会的現実の問題 [I]』マルジュ社、225–237).

(いけやのぞみ・慶應義塾大学文学部)